

施設キュウリの摘心栽培に関する研究

(第5報) 摘葉時期が収量におよぼす影響

野口敏治・利光泰郎・松原武彦

(大分県農業技術センター)

NOGUCHI, T., TOSHIMITSU, Y. and MATSUBARA, T.

Studies on the Topping Culture of Cucumber Plants in Plastic Greenhouses.

(V) Effect of Leaf Thinning Time on Yield.

前報において、側枝葉への光線透過を促すために主枝葉の摘葉を行う場合、その程度を強度に行うほど減収することを報告したが、本報告では摘葉時期を側枝の生育程度との関連で検討したので報告する。

I. 試験方法

“くるめ春”を供試し、1月3日には種し、フィッシュポリアに接ぎ木して、うね幅180cm、株間50cm、2条植えて2月7日に定植した。仕立て法は主枝1本仕立ての22節摘心とし、側枝の整枝は子づる、孫づる、曾孫づると順次1葉で摘心した。本葉の摘葉時期として、A. 子づる果収穫時、B. 孫づる摘心時およびC. 孫づる果収穫時にそれぞれ同節位の摘葉を行う3区を設け、対照として主枝葉が黄化した時に摘葉を行う、D. 慣行区を設けた。いずれの区とも黄化した側枝葉は適時摘葉した。

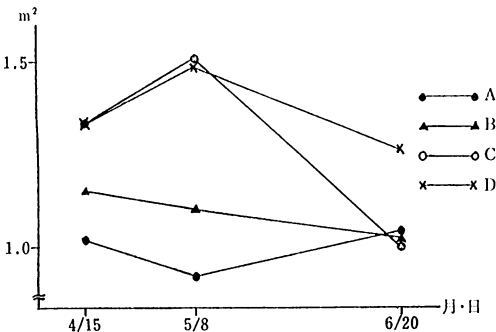
II. 結果および考察

主枝の摘葉は、A区では中位節を除く上位および下位節で展開40~50日後に行い、B区では50~60日後、C区では60~70日後に行った。中位節では側枝の発育が遅れたため、いずれの区も摘葉が上位および下位節より10日

程度遅れた。B区は黄化した葉を順次摘葉したが収穫終了時までには下位葉を9葉程度摘葉したにとどまった。

収穫最盛期の5月8日における株当たり葉数、および葉面積はD区=C区>B区>A区であった。収穫終了時(6月20日)の調査では、葉数はいずれの区とも44枚前後と大きな差はなかったが、葉面積はD区で1.3m²、他の3区で1.0m²程度となった。しかし、C区およびD区は下位節での葉数および葉面積の減少がみられた。側枝発生は、子づるではいずれの区とも100%近く発生したが、孫づるおよび曾孫づるでは本葉の摘葉が早い区ほど中位節の発生が高まる傾向がみられた。側枝長はいずれの区とも差がなかった。6月20日までの総収量はD区>C区>B区>A区であった。つる別では子づるでの収量差が大きかった。これは子づる果収穫最盛期の4月下旬~5月上旬ごろの葉面積の差が影響したと考えられる。

以上の結果から子づる1葉摘心を行う半促成栽培では全期間を通じてできるだけ葉面積を確保することが望ましく、摘葉法としては、葉の黄化を認めた後それを摘除するだけで良いと考えられる。



第1図 株当たり葉面積

第1表 収量 (6月20日まで、a当たり)

処 理	項 目	主 枝		側 枝		計	
		果数	果重	果数	果重	果数	果重
A.	子づる果収穫時	3,191	309 kg	8,786	943 kg	11,977	1,252 kg
B.	孫づる摘心時	3,173	301	9,235	1,001	12,408	1,302
C.	孫づる果収穫時	3,338	327	9,544	1,030	12,882	1,357
D.	慣 行 行	3,504	331	10,243	1,114	13,747	1,445